

大切に育てられたひのき集成材の家具と そこから繋がる「森と人とを繋ぐ人」の話

ネットで、素敵な「国産間伐材利用の組み立て家具」を見つけました。クラウドファンディングのCAMP FIRE※1というサイトにあった、「日本の森から作られた家具「KIKIKI」純国産材の組み立て家具プロジェクト!」※2がそれです。

チェアの背板がわずかなカーブを描く以外、細めの材を直線的に構成したシャープな印象。これが華奢すぎず安定感たっぷりなのは、しっかりと直角に組み込まれた集成材ならではな



でしょう。香りのしそうな無塗装のヒノキの柔らかさを、黒いビスと焼き印がもう一度引き締めるよう。本当にカッコよくかわいいくてオシャレな椅子なのです。読み進むとこれが、四万十町森林組合 大正集成材工場で作られているのだとわかりました。

あれれ?これは、大正の、川沿いの、あそこ!?!という事で、さっそく話をうかがいに行ってきました。

竹内将純さん。大正町出身、大正町森林組合（現 四万十町森林組合）に就職し、集成工場の立ち上げ準備から携わり平成9年に工場が稼動してからは営業にまわって、森と木の仕事一筋に41年。

「来年定年を迎えるけれどもまだ暫くは・・・でもちよつと遊びもせんといかんので1年毎の契約更新にさせてもらおうつもりです」と笑う、大変物腰やわらかでスマートな印象の方です。

「集成材を作り、家具にまで仕上げるようになって、

森林組合が、森を育てて切ったものを消費者に届けるまで一貫して携わることができるようになりました。山の手入れもできるようになり、地域の雇用にも繋がって、やっと循環する形ができてきたのです。」

国道から川に下るように傾斜した敷地に運び込まれた丸太は、事務所を真ん中に、製材、乾燥、裁断、加工、家具作りの工房まで隣り合っています。製材した端材と捨てられていた間伐材を利用する。さらに製品に使えない部分は乾燥機の燃料になります。反りや縮みのない材にしてゆくために、一番難しくて品質の要となるのは乾燥の仕方なのだそう。これを職人が選別して木の節を除いて裁断、組み合わせで接合。接合部分は細かいぎざぎざに組み合わせられた“フィンガージョイント”、この合わせ目には針の先程の穴があってもいけないという、きびしい品質管理がされています。お話いただく端々で、細かい難関をひとつずつ丁寧にクリアし、無駄なく大切に、手間をかけて・・・シンプルなポリシーを一貫して地道に着実に積み上げられているのがわかります。丁寧に作られた材はそれだけで緊張感と温かみを併せ持っていて、その魅力を感じ



て、その魅力を感じ活かしたいと思った人達の手によって、自然とシンプルでやわらかなデザインの家具が生まれでているのだと感じました。

大正集成工場が立ち上げられたのは平成元年、単価の低い間伐材を県外に運び出すよりも集成材製品にしようというこ

※1 クラウドファンディング

ネットで、プロジェクトを公開して支援者から出資をつのって一定額に達したら始動する方法。

◇CAMP FIRE URL

<http://camp-fire.jp/>

※2 ◇KIKIKI プロジェクトの URL

<http://camp-fire.jp/projects/view/1230>

裏面

※3 ◇コクヨ CSR「結の森」プロジェクト

<http://www.kokuyo.co.jp/csr/yui/>

とで、取り組みは全国でもかなり早かったのです。当初は大手林業会社との大口の取引が中心で、建材や天板などの部材を生産していました。でもそれだと下請けだけになってしまう。この方向では先がない、たてなおそうということになって、平成9年加工場の隣に家具の工房をつくり、職員も入れ替えました。今はオリジナルでデザインをして完成品を届けるまで、全ての仕事が出来る体制まで整えることができました。家具作りを勉強したいとやってくる若者なども加えて150人からの職員がいる規模になっています。

「取引の現場にまで営業に出てみて気がついたのは、消費者に届けるまでの「森と人を繋ぐ人」が本当にいない、ということ。森から、生産の側から見ていただけでは気づけなかったのですが、今になって高校で林業を学んで、木のこと森のことを勉強していて本当によかったと思っています。」

家具工房も最初はやはり大手企業の家具を作るところからはじまりました。なかでもオフィス文具・家具メーカーのこくよとの取引は「結の森」プロジェクト*3という実を結び、森林の整備、再生、環境調査や保全活動に繋がっています。また全国どこからでも他の産地のどんな木も、加工して戻すことをやっています。特に東京都の森林組合に関しては100%大正町で加工を請け負っているのだそうです。

KIKIKIのプロジェクトもこんな関係から、こんなものはできないかと相談されたのがはじめです。彼らの持っていた2つのプロジェクト~United Arrowsの仮設の展示会用のブースの構成という仕事と、港区での親子向けの木工ワークショップの企画とを繋ぎたい。あらかじめ双方にコンセプトを説明し了承を得て、仮設ブースに使用した材を、解体後再利用して組み立て式の椅子を作る、設計段階から椅子の部材をとれるように計画するということでした。今回CAMP FIREでのプロジェクトは

この時に設計された組み立て家具を、ワークショップとは切り離して販売する形になっています。

他にも子供用の小さくて軽い机と椅子等のMORITOというシリーズや、宿毛の森林組合と一緒に、地域の材を加工し大月の保育園へ納入するという仕事を、構造の計算や加工の手配など請け負う形で進められているそう。商品を開発する場面で女性、特に若いお母さんのセンスを大事にしているといい、家族で愛着をもって長く大切に使ってほしいという気持ちがうかがえます。お客さんの希望に沿って、アレルギーやアトピーのある人の為に、天然材料の接着剤だけを使い、家具を仕立てたこともあるそうです。

「基本は、もったいないことをしないということ。端材に至るまでゴミをださない、欲しいものについてよく話をして細かいオーダーに対応するからこそ、無駄がない。プロジェクトの大小ではなく個人相手にも、細かいことも丁寧にやってあげる。」

無駄なく、大切に、時には厳しく、細かいことも丁寧に・・・こつこつと積み重ねられたこれは、まるまる山の仕事と同じ方式なのだと気がきました。木を森を育てるように、プロジェクトを、人を、工場を、育ててこられたということなのでしょう。

「これから、戦後植えた木が出荷できるようになる。国産材の時代が来ます。他にもMORE TREESの奥多摩の森をなんとかしようという話、マンションのリフォーム用材と、いろいろあります。そうそう、マレーシアに「ひのき」のショップができようとしています。そしてやはり、31以降東北のことを考えます。東北から材を預かって、地域に返すことができないか、自分たちのことだけを考える時代ではないと思います。」

スマートな印象はいつのまにか、大きく根をはった大木のように・・・にかわってしまいました。世代も地域も超えたスケールの大きな、静かな山の人の人なのでした。

新経理スタッフと 臨時事業スタッフを 紹介します。



◆9月1日よりお世話になってます中野理子（みちこ）です。前任の方に比べればまだまだ至らないことが山盛りではありますが、持ち前の明るさと気合で頑張っていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします！来月には早速、樵養成塾に参加しますので、チェーンソー手帳取得に燃えています！！

◆昨年春から清流通信の担当もしてまいりました、事業スタッフの武市真実が、11月から来年3月末まで産休をいただきます。5ヶ月間の臨時スタッフとして、この通信も担当させていただくことになりました、多田さやかです。これまでも四万十川流域では、くろそん手帖、学生キャンプ、鹿の料理教室や動物の観察会等に出発、通信のお届け先には、お目にかかったことのある方もいらっしゃるのではないかと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

